

小学部 2 段階児童に対する挿絵を「見る」指導の取組

～内容把握と表出の方法を分けて～

発表者①黒川健太郎

発表者②上野四季

発表者③有吉美咲

1 児童の実態

対象児 3 名が小学部 2 段階に該当する。対象児の中には発語のない児童もいるが、簡単なジェスチャーでやり取りができる。国語科では絵本の読み聞かせを継続的に行っており、挿絵の様子を動作で表現する学習に取り組んでいる。

2 指導・工夫の意図

教材は、動作で表現しやすい挿絵がある「角野栄子のアコちゃん絵本 ぼかぼかぐ～ん（作／角野栄子 絵／よしむらめぐ 出版社／小学館）」を選定した。挿絵に注目するための手立てとして、モニターで表示したり効果音を入れたりした。「小学部 2 段階読むことア」の目標に対応した内容把握の方法および表出の方法をそれぞれ設定した（図 1）。

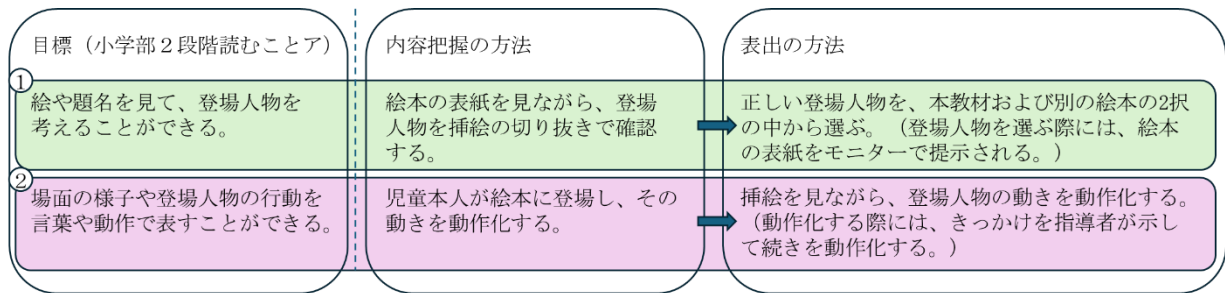


図1 目標に対応した内容把握の方法および表出の方法

3 取組の実際・児童の様子

全 5 時の単元にて 4、5 時の行動の様子から評価した。複数人の小学部教員で動画を見て評価が妥当であることを確認した。「おおむね満足できる」を「○」、「質問が理解できていない等で評価できない」を「－」とした（表 1、表 2）。

表1 2択で正しい登場人物を選ぶことの結果

児童	ぼかぼかぐ～ん/ほかの絵本	児童の様子	評価
A児	1回目 タンポポ/さかな 2回目 ボール/にわとり	迷わずにタンポポを指した。その後、別の問題や友達の間違っていた際にも正解を指していた。	○
B児	1回目 いもむし/かたつむり	最初はいもむしを指したが、教員が反応するとカタツムリに変え、その後もカタツムリを指していた。	－
C児	1回目 ねこ/うさぎ 2回目 ケンちゃん/カエル 3回目 家/にわとり	発問を繰り返して再確認したが、ウサギやカエルを指していた。友達や教師の答えを何度か見たのち、3回目の問題では迷わずに正解した。	－

表2 挿絵の登場人物の動きを動作化することの結果

児童	登場人物と動作	児童の様子	評価
A児	いもむし、クマ、ボール	片腕を上げ、もう一方を少し曲げるポーズをした。曲がっているいもむしを表現したわけではなく、クマでもボールでも似たポーズをした。	○
B児	タンポポ、タンポポ	手足をまげて構えてから背伸びをしたり、腕を伸ばしたりした。	○
C児	ネコ、太陽、ネコ、ケンちゃん	ばんざいや、背伸びからジャンプしたり、ぐーんと声を出したりした。	○

4 成果と課題・今後の改善策

表 1 の 2 択で正しい登場人物を選ぶことについては、「どちらが出てきていたか」という質問が理解できていない可能性が考えられた。同じ絵本を用いて 2 択で正しいものを確認することを繰り返すと、繰り返したことで正答できるようになると思われる。そのため、今後は様々な絵本で上記の質問をして質問の意味理解を促す必要がある。また、この表出の方法自体が小学部 2 段階の児童に適しているか検討することも課題といえる。

表 2 の登場人物の動きを動作化することについては、おおむね満足できるという評価が得られた。今後は別の場面や登場人物を連続で示すなどして、場面や登場人物に応じて動作を変える様子の有無も評価できるようにする必要がある。

以上のことから、小学部 2 段階児童に対する挿絵を「見る」指導の 1 事例を示すことができた。今回、児童の動作化を評価で扱ったが、目標に対応した内容把握の方法および表出の方法をそれぞれ設定したことが適切な評価につながったと考えられる。

読み聞かせの充実に向けた取組

いろいろな絵本等への興味を育む「おはなしタイム」の設定

発表者① 三宅 和憲 発表者② 中村 光宏 発表者③ 梅木 綾子

1 児童の実態

各教室から近い小学部ホールの一角に、絵本コーナー（おはなし広場）があるものの、児童たちが手に取る本は図鑑や好きな絵本など限定的で、同じ本を繰り返し選んでいることが多い様子であった。

2 目的（指導・工夫の意図）

児童がいろいろな絵本等に興味をもつことを目的として、2022年10月、「おはなしタイム」の取組を始めた。小学部教員が朝の会前の10分間程度、絵本の読み聞かせを小学部ホールで行っている。

この取組にあたっては、試行錯誤を重ね、以下の工夫等を行っている。

- ・絵本は学習指導要領を参考に、繰り返しの展開、話がわかりやすい、オノマトペがあるなどの観点から選ぶ。
- ・絵本の内容に親んでもらうために、1週間、継続して同じ絵本を教材として扱う。
- ・おはなしタイムの見通しをもつために、児童玄関のモニターに、今日読み聞かせを行う絵本を提示し紹介する。
- ・おはなしタイムの活動の始まりを意識できるように、手がかりとなるBGMを流す。

3 取組の実際・児童の様子

2022年10月に「おはなしタイム」を開始してから2024年7月までに、のべ159冊の絵本の読み聞かせに親しんできた。

「おはなしタイム」の時間では、嬉しそうな表情で絵本に注目したり、話し手の語りに続けて絵本の叙述の一部を読みあげたり、読み聞かせの後に教師と一緒に絵本の動作を真似たりする様子が見られた。また、他の児童と同じ空間ではないが、隣の教室から参加し、読み聞かせを楽しんでいる児童もいた。また、「おはなしタイム」での読み聞かせた絵本を、休み時間等で絵本コーナーにある同じ絵本を手に取り、読書を楽しむ児童の姿も見られた。



▲「おはなしタイム」での読み聞かせ絵本に注目し楽しむ児童

おはなしタイムを開始した当初と比べて、始まりを知らせるBGMが流れると、自分から小ホールに集まって自分の椅子を持ってくる児童が増えました。

4 考察（成果と課題・今後の改善策など）

「おはなしタイム」で教師が読み聞かせた絵本を、休み時間に再び手に取ろうとする姿からは、この取組により児童が新しい絵本に興味をもち、実際に手に取る機会になったのではないかと考える。また、1週間同じ絵本を扱うことや、児童玄関のモニターに今日読み聞かせをする絵本を紹介することは、積極的に読み聞かせの活動に参加する児童が増えたことにつながったと考える。

今後も「おはなしタイム」で絵本等への興味を育んでいくには、児童の姿を取組に反映させていくことが大切であると考えている。現在は児童の様子の詳細は記録していないが、読み聞かせを聞く様子やおはなし広場で読書する様子を見取って学部教員で共有する時間をもつことで、選ぶ絵本の参考にしたり、1週間の使い方を検討したりしたいと考えている。